



南アフリカ共和国からの便り



一時帰国 編

2019 年度青年海外協力隊
赤塩健太 小学校教育 No.8

3月末、世界で拡大する新型コロナウイルスの影響で、日本へ一時帰国しました。6月現在も、日本に滞在中です。今後も世界の感染拡大の状況をふまえ、南アに帰国できる日が JICA によって判断されます。今回は南アの状況を、私の経験をもとに記事にします。



出発前の南ア空港。多くの方が出国の手続きをしていました。



帰国中の機内。添乗員さんはマスクをしていました。

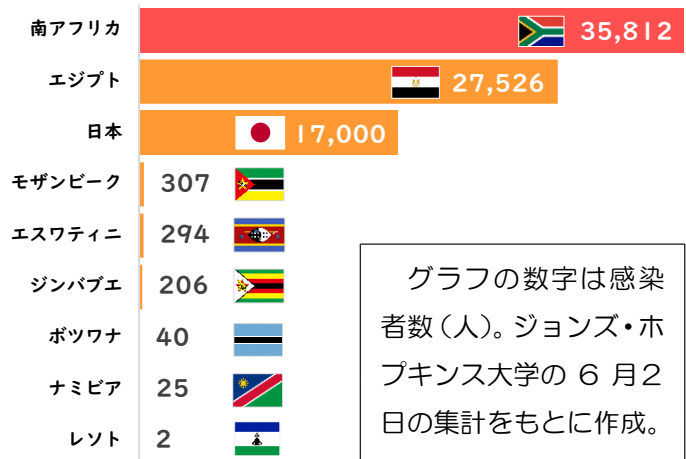


3月25日、成田空港に到着。ガラガラでした。

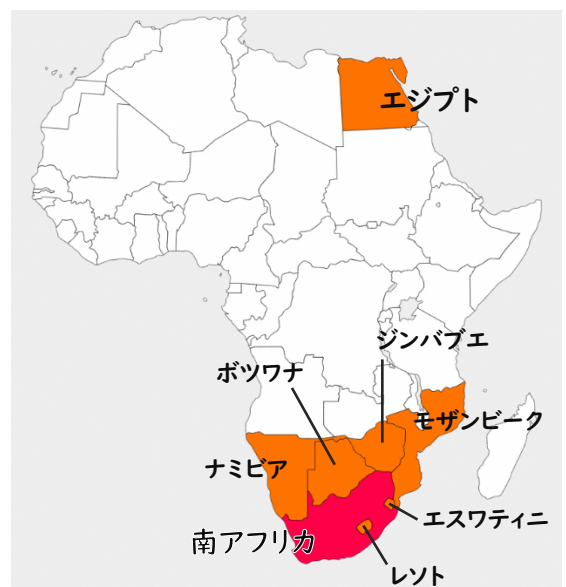
南アフリカ共和国の感染状況は？ 医療体制は？

6月2日の集計では、南アフリカ共和国の感染者数はエジプトを抜いて、アフリカ大陸で最も多くなっています。右のグラフには、南アと国境を接する国を全て載せましたが、まわりの国と比べると、感染者数で大きく差をつけています。

「アフリカの医療は大丈夫だった？」とよく聞かれます。南アでいえば、医療はかなりすすんでいます。日本と変わらない大きさや設備の私立の病院がいくつもあります。しかし、治療費は安くありません。貧富の差が激しい南アフリカです。私の経験上、少しお金に余裕のある人が病院へ行くイメージがあります。



知り合いの多くは薬局で薬をもらって治していました。ドラッグストアには、たくさんの薬があります。



悲しい思いも

1月頃に中国の武漢で最初の新型コロナウイルスの感染者が確認されてから、日に日に南アでもニュースが大きく報道されるようになりました。2月にはヨーロッパでも感染が拡大し、ヨーロッパに近い南アの人たちも心配し始めていました。

「ウイルス=中国」というイメージの強いためか、日本人の私を見ると「コロナだ!」と言ってくる人や、目の前で露骨に自分の口を押えて去っていく人もいました。未知のウイルスなので、みんなの行動に理解はできませんでした。しかし、よく行くお店の店員さんですら、私を接客した後にまわりの人に「消毒液をちょうだい!」と言っていたことは、さすがにショックでした。

日本人が私一人の町で、悲しくさみしい思いをしたのが正直な気持ちです。



一時帰国前、最後の一枚。家の前にて。

同僚の支え

普段から、疑問に思うことや納得のいかなかったことは同僚に話していました。今回のコロナでつらい思いをしたことも正直に話しました。そんなときはいつも温かい言葉をかけて励ましてくれました。

「心無い人もいるよ、気にしないで!」「ケン、日本人。そんなことで日本を嫌いにならないでね。自分の国に誇りをもって!」

仕事帰りに、乗り合いタクシー乗り場と同僚と行ったときは、私を現地語でからかってきた人たちに、同僚が真剣に怒っていました。私は言葉が理解できなかったので、からかわれていることすら気付きませんでした。が、「なんて言っていたの?」と同僚に聞いても「気にしないでいいよ!」と言っていました。

心優しく、心強い同僚に何度も救われていました。



毎日一緒に帰っている同僚達。

少しでも早く、
自由に人と会って、
気兼ねなく話ができる日々になることを願っています。

